常葉学園大学造形学部
研究紀要　第6号・2008
夏池　篤
NATSUIKE Atsushi
杉田達哉
SUGITA Tatsuya
蜂谷充志
HACHIYA Mitsushi
土屋和男
TSUCHIYA Kazuo

静岡アートドキュメント2007

Shizuoka Art Document 2007

日時：2007年1月13日(土) ― 21日(日)
会場：静岡市葵区青葉公園・市内各所

静岡アートドキュメント2007を終えて

夏池　篤

2007年１月静岡市内各所で展開された初めてのアートイベント「静岡アートドキュメント2007」について、開催に至る動機、趣旨と概要、経過、反省点と今後への展望をまとめて述べてみた。

美術館における啓蒙的な展示や作品の優劣のみを競うコンクールから少し距離を置いて、自分たちの生活の中に基盤をおいた表現の場に対する思いを以前から持ち続けていた。

静岡市にある画廊やギャラリーの数はあまりにも少なく、若者が意欲的に作品を発表できる画廊に至ってはほとんど無いといってよい。このような状況は近年に始まったことではない。東京と名古屋の大都市の中間に位置し、新幹線で１時間あまりで移動可能な地域にあって、アーティストは地元で作品を発表するより、大都市で発表するほうが手っ取り早くメリットも大きかった。それでもまったく動きが無かったわけではない。1970年前後においては、県内出身の美術評論家石子順造を中心としたグループ「幻触」が結成され、全国的にも注目される現代美術の活動となっている、また80年代には「アートスペース」が、90年代には「A-value」が県内の若手現代美術家を中心とした自主企画展を行ってきた。しかしながら現在は、主だった動きがない。

このように現時点では、静岡の美術家にとって地元での発表の場が制限され、市民にとっても身近な場所で鑑賞する機会に恵まれないというさびしい状況が続いているわけだが、ここに来て地方美術にとって新しい動きが出始めている。

大都市においては、バブル崩壊後画廊の多くが看板を下ろし、美術館の企画も確実に入場者の見込める内容のものがほとんどで冒険的なものは少なくなっている。このような経済的な停滞による影響と近年のインターネットの急速な普及により、大都市での経済的負担の大きい展覧会より、地方からの情報発信の可能性に興味を持つアーティストが増えてきている。地方にあっても内容さえ充実していれば、美術展としての十分な成果を上げられる。その代表的な例として新潟の山間部を中心とした国際的美術展の「大地の芸術祭」、茨城県の田んぼの中で作家たちの自主企画で行われている「雨引の里と彫刻展」などがよく知られている。

国や地方公共団体が独立法人化を推進する過程でやせ細る文化行政の中、発表の主体となる美術家、デザイナーによる地域と一体になった美術活動が今こそ必要であり、可能であると考えた。

そこで今回は、静岡市の商店街を中心にアートイベントを展開するという企画を提案した。静岡市は城下町という歴史的要因もあり、全国でもとりわけ落ち着いた雰囲気のある洗練された都市である。街の景観の美しさや文化的な活動へ向ける住民の関心も高いと思われる。ここに住む人々と十分なコミュニケーションをとりながら、生活の場を作品化するという試みは、静岡の町に新しい表情を与えると同時に、その環境に触発され、その地域でしか創造することのできないアートの発信を可能にすると考えた。

静岡市の中心に位置する青葉通り公園にはパーマネントな作品がいくつか設置されているが、地元の立体作家の作品は展示されていない。そこでこの通りに作品を展示できないものかと考えた。しかし人とのコミュニケーションをテーマとした作品には最適の環境であるが、作品の管理、会場費等多くの問題がある。市の公園緑地課にあたってみたところ、通行の妨げにならないこと、夜間における表示等の条件は付いたが、大学のような公共の機関が主体的に使用する場合は、料金が免除されるとのことで、展覧会開催の感触が少しつかめた。参加作家には、作品をただ展示するだけでなく公開制作のような形式が取れないか、あるいは街の環境や人とのコミュニケーションを考えた作品を制作できないか提案をした。

この企画の発端は、前年に授業で学生たちが静岡市紺屋町の小梳神社境内で開催した野外彫刻展である。学生による展覧会は、授業としての試みとしてはおもしろかったが、街とのダイナミックなコミュニケーションは生まれそうになかった。そこで今回地域の作家、デザイナーに呼びかけ、都合31人の参加者によりこの企画が始まった。

昨年は、主体であった立体造形コースの学生は、今回は紺屋町地下空き店舗でエスキースを展示し、学外からの参加作家の作品展示と管理のサポートにまわった。学生が自分の作品を自己流に展示するだけだった前年と違い、作家のサポートを通して作品のコンセプ

ト、空間配置、作品に対するこだわり等を知ることができた収穫は多かったのではないか。

今回の展覧会でもっともクローズアップされた場所の一つに、小さなプラネタリウムがある。1959年に竣工され活況期を過ぎた後、映画館の屋上で静かに時を過ごしていた施設である。都会の一角に取り残された空間の内部は、３面マルチ画面による映像作品上映の場となった。老朽化したプラネタリウムに刻まれた歴史は、作品制作にあたってのヒントとなると同時に、映像作品の持つ時間性と重なり、作品に説得力を与えていた。

もう一つ静岡の歴史を体験できるのが、浮月楼である。そこは徳川慶喜屋敷跡の歴史的空間で、展示に使用したここの画廊は近年増築されたものである。その窓から眺望できるのは、回遊式の日本庭園である。ここでは９人の作家が現代感覚あふれる作品を展示し、場所との鮮やかなコントラストを見せていた。

３名の作家は商店街の店舗の中での展示に挑戦した。商品が詰まった店の中にかろうじてニュートラルな空間を確保したケース、商品と作品が一体となりながら、商品を相対化するように作品を扱ったケース、店の空間に以前から常設されているかのようにとけ込ませたケース、どれも店舗の所有者とのコミュニケーションの中で展示が実現したことが見て取れ、街の中での展覧会で期待していた展示であった。

ファインアートの展示だけでなく、デザイン作品の展示も並行しておこなった。学生の制作したイスをモダンな家具や雑貨品を扱っている店頭に置くことで、学生は自分の作品を一流デザイナーの作品と相対化してみることが出来る良い機会となった。もう一歩踏み出して、街頭で通行人が自由に座れるような企画も可能であったかもしれない。

作品展示に加え講演会『アートと世界―インゴ・ギュンターの仕事から』と建築系ミニシンポジウム『街をデザインするって何だろう』を企画に加えた。講演者のギュンター氏は、社会とアートを一体に考える作家であり、今回の企画にこれ以上の人はいないと思われる適任者であった。講演に先立ち展覧会場を一巡していただき、居合わせた作家と作品を通しての交流が生まれたことは幸運であった。

またミニシンポジウムでは、建築家をパネラーとした討論会と学生による街に対する提案が発表された。箱物の話ではなく街を構成するソフトウエアに関する問題が多く提起されたのが大きな収穫であった。

最終日前夜には、作品が壊されるという大変残念なハプニングも起こった。まさにこれは、街の中で作品を展示することの難しさを思い知らされる事件であった。

今回のアートドキュメントでは、展覧会という形式だけにとどまらず多角的な視点から街へアプローチすることが出来た。その中で様々な今後の問題やテーマが浮き彫りにされた。そして関係者の多くからは、このイベントの継続的開催へのはたらきかけがあった。次回の開催をもって今回出された宿題の提出が出来ることを願う次第である。

最後に、この企画は常葉学園大学の活性化事業認定による助成金と静岡市文化振興財団による文化振興事業費助成金の交付を受けることができた。企画に参加頂いた作家、デザイナー、学生と展示施設等を提供頂いた紺屋町商店街、教覚寺、浮月楼、静活株式会社、LOFT、ミカサ写真館、Un tissue、トラヤ、サバイディール、静岡音楽館AOI、静岡銀行ならびに事務運営に側面からフォロー頂いた常葉学園の関係者の皆さんに心より感謝いたします。

出品作家一覧

アイウエオ順

安部　一博
石上　和弘
伊東　槃特
今井　瑾郎
内海　健夫
奥中　章人
長船　恒利
加藤　和夫
岐部　琢美
栗木　義夫
黒柳　正孝
坂田　和之
柴田美千里
杉村　　孝
杉森　順子
鈴木　亘彦
銭谷　　均
田宮　話子
夏池　　篤
丹羽　勝次
蜂谷　充志
松浦　峰里
松野　　崇
持塚　三樹
山内　啓司

安部一博
ABE Kazuhiro

題名：回廊－記憶　'05-1
素材／技法：リトグラフ
大きさ：42×62cm
発表場所：浮月楼ギャラリー

イタリア記

夏、イタリアを旅行した。さまざまな遺構が残り、最初は眼を奪われたが、次第に眼は生活跡のある扉や壁に向いていった。町よりも田舎へ、他人の存在感の濃い、人の気配を感じる風景を求めていた。私の拘りは、関係であり、時や隣り合ったり、重なることにより強調される間にある。年が経ち、新たに加わった今回の旅も悪いものではなかった。

石上和弘
ISHIGAMI kazuhiro

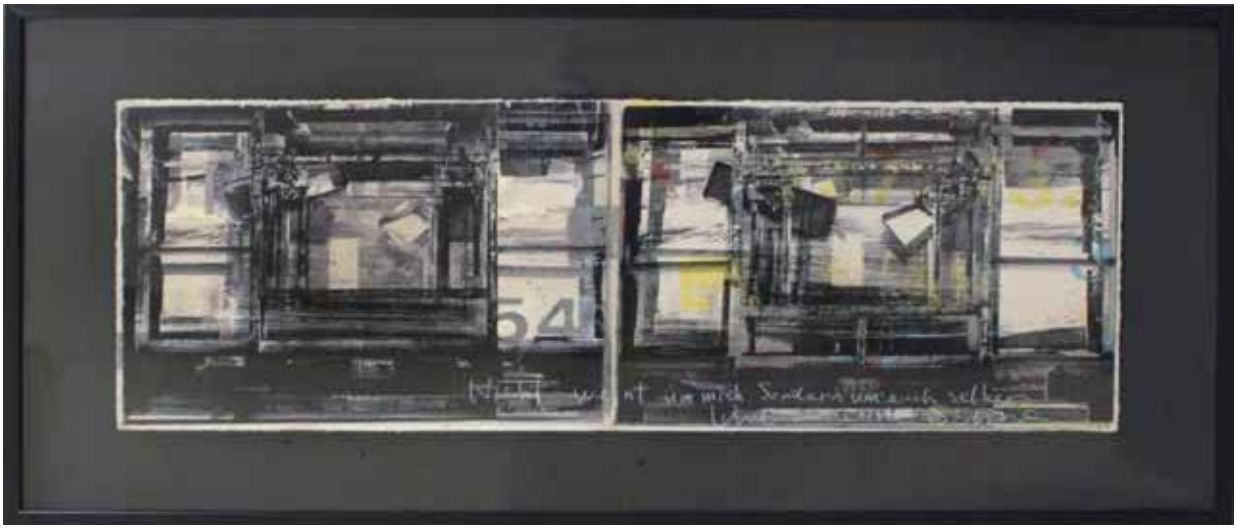
題名：新宿牛
素材／技法：FRP
大きさ：台座を含めた高さ 355cm
発表場所：青葉公園

「ラジオのように」旅先の青森でＮＨＫの旅するラジオーハチマルチャンに遭遇。スタッフと話もできました。ここ最近アトリエでは専らラジオなので嬉しい出来事でした。スイッチをひねるとその向こうに広がるラジオのように僕も常に準備しておきたい。

伊東槃特
ITO　Hantoku

題名：哥（うた）－138
素材／技法：ドローイング（アルシュ、雁皮、コピー、アクリル絵具）
大きさ：130×55cm
発表場所：浮月楼ギャラリー

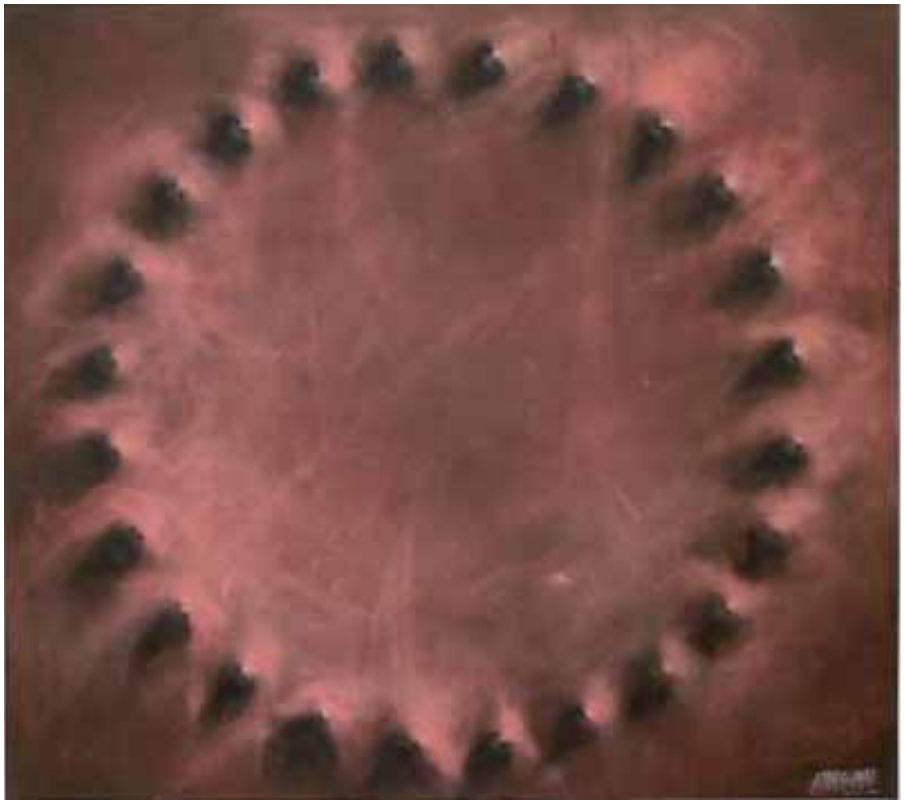
現代において自己証明は、いかにして存立するのか、ランダムに指定された数字と人間（私一人）の関係を･･･。



今井瑾郎
IMAI Kinro

題名：大地
素材／技法：ドローイング（CANSON紙、マーカー着色、パステル、色鉛筆）
大きさ：800×800cm
発表場所：浮月楼ギャラリー

時間の概念をこえていく始原的な大地、そこに宿る生命の鼓動、すべては詩的イメージのなかに―



内海健夫
UTSUMI Takeo

題名：ある情景
素材／技法：木板、白亜地、色鉛筆
大きさ：14.5×14.5cm
発表場所：Un tissu

棚に陳列されている商品の中に、作品が溶け込むような展示を心掛けました。

奥中章人
OKUNAKA Akihito

題名：「world -roofgarden-」
インスタレーション
素材／技法：鉄、ポリエチレン
大きさ：1700×2600cm
発表場所：静岡ピカデリー屋上

題名：「world -roofgarden-」映像
素材／技法：DVD× 3 （20分）
大きさ：1700×2600cm
発表場所：静岡ピカデリー屋上
プラネタリウム

インスタレーション
陽の当たる、人目に当たらぬ場所への誘い。この街の埋もれてしまった風景や歴史の文脈はアンダーグラウンドだけではなく、オーバーグラウンドにも存在していた。陽の光に照らされ、荒廃していくこの場所を見つめる。

映像
映像作品はこの展示場所から臨める景観で構成されています。
この場所でこの瞬間にしか記録されない「景」しかし、どこででも臨めるかのような「景」そのような「景」への観点を場所との交わりから見つめる。

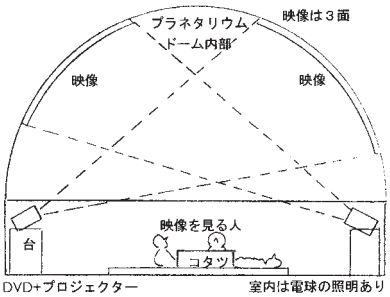
長船恒利
OSAFUNE Tsunetoshi

題名：父母の肖像
素材／技法：ビデオ、８ミリ映画、写真　（20分46秒）
発表場所：静岡ピカデリー屋上プラネタリウム

「プラネタリウムでムービーを」

静岡市の七間町、そこにはずうっと昔から映画館が集積し、今もミラノ、ピカデリー、小劇場、オリオン、有楽、東映、東宝と、現役のシネマストリートである。その七間町通りを歩いて、ふと見上げると、そこにシルバー・ブラウンに彩色された球状の物体が見えるではないか。これが「静岡のかくれた名所」プラネタリウムである。1959年（昭和34年）に竣工し、夢多き少年少女が、満天の星空をながめていたこのドームは、48才となって半円球の白いスクリーンを、内部に秘めている。このドーム状球形スクリーンに、３面マルチスクリーン映像を映し出す。

３面マルチスクリーンで、３つの物語が同時進行する。３つの時間（時代）と、３つの映像メディア（ビデオ、映画、写真）が、相互交通し、重層的な物語へと形づくられていく。映像は資料であると同時に、感情の想像力にはたらきかける。



プラネタリウム正面図
内部直径7.6m，高さ6m

加藤和夫
KATO Kazuo

題名：伝言
素材／技法：ゼラチンシルバープリント
大きさ：25×35cm
発表場所：ミカサ写真館

約25年くらい前に何らかを飛ばすシリーズで撮っていた。そしてまた飛ばしてみる。母親が昨年６月に去り、数少ない残っていた遺品を投げる。私も幼年期、青年期の玩具、着衣を投げ宙に舞う様を焼き付ける。

岐部琢美
KIBE Takumi

題名：THE PRESENT STATE
素材／技法：鉄・ワイヤーロープ
大きさ：180×400×300cm
発表場所：青葉公園

意識や思考の対象となるもののなかで、「もの」と「もの」との関係や、時間の経過に伴う「もの」の変化など、形にあらわれにくいことがら、すなわち、「事」は、私にとって、存在と認識のうつろいのようなものに移行していく。

栗木義夫
KURIKI Yoshio

題名：無題
素材／技法：鉄、紙
大きさ：50×25×10cm
発表場所：浮月楼ギャラリー

異素材による構成

黒柳正孝
KUROYANAGI Masataka

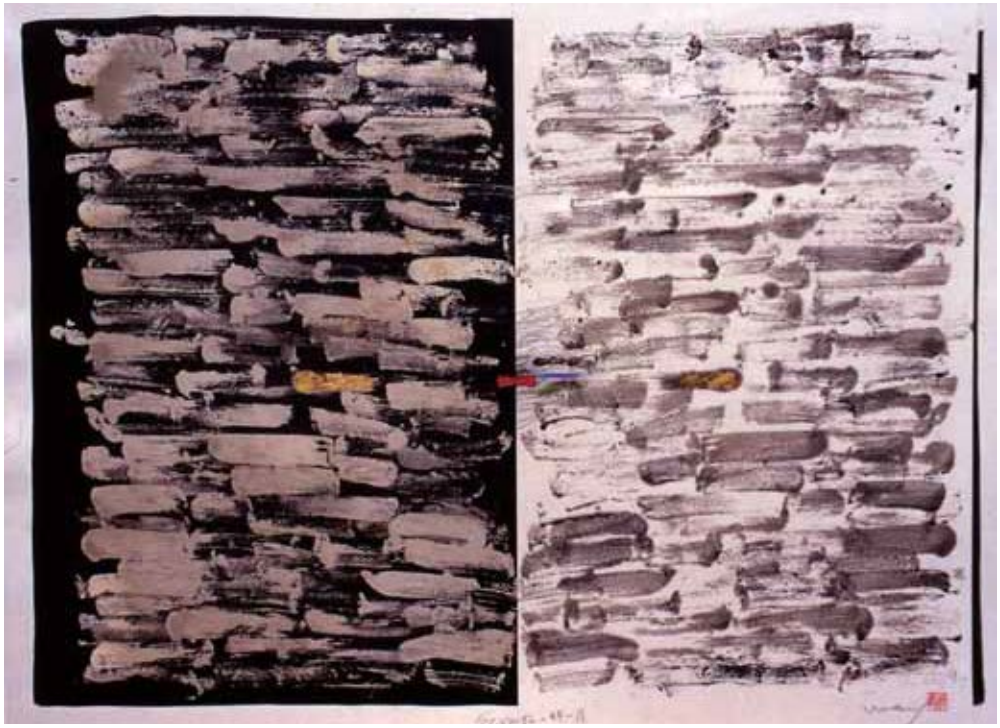
題名：Two Blocks
素材／技法：銅版画（メゾチント）
大きさ：25cm×60cm
発表場所：浮月楼ギャラリー

「対比の基点」
この作品で、自然と人間とがつくりだす造形を「石」というテーマで対比させ、むしろそれらの質感とともに調和を表現しようと試みた。
画面構図は 2 つの石群を上下に配置し、波線で区切っただけの極めてシンプルなものとした。画面構成をあれこれといじるより、単純に置した方がより強い効果を生むと考えたからである。以後、いくつか対比シリーズの作品が存在するが、いずれも対比による作者の視点の提示となっている。

坂田和之
SAKATA Kazuyuki

題名：SCRAP－Ⅲ
素材／技法：ドローイング（BFKリバース、蜜蝋、墨、アクリル）
大きさ：60×95cm
発表場所：浮月楼ギャラリー

シリーズ制作Ⅰ～Ⅶまでの 1 点。海岸、河口などに堆積したさまざまな裸木。激しい波で打ち寄せられた時に見せられた様のクズ光景。紙に蜜蝋ドローイングして熱で溶かして反転した。表裏、陰陽、＋－などの造形言語として捉えた。

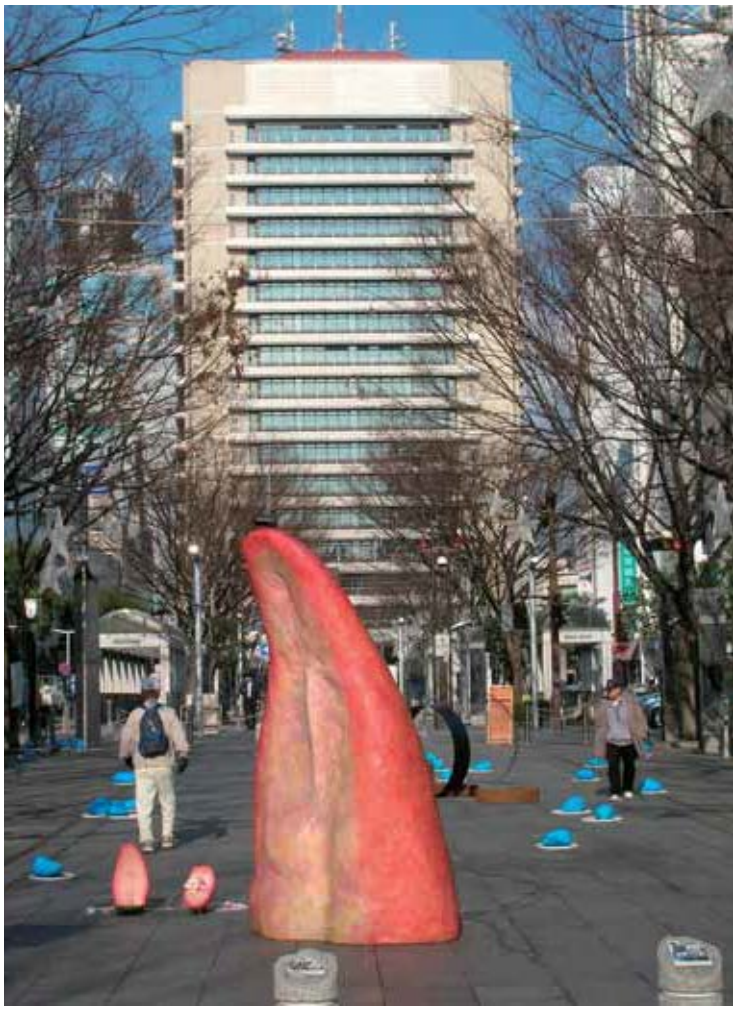


柴田美千里
SHIBATA Michiri

題名：太陽を嘗める
素材／技法：ウレタン＋シリコン
大きさ： 242×147×110cm
発表場所：青葉公園

作品は表面が柔らかい高さ約2.5mの巨大な“べろ”この物体を介して太陽を嘗めてみたらどうだろう？

私にとって静岡の街に展示することの意味は大きい。世界と恋愛を教えてくれた映画、初めてのシェイク…私の夢を育ててくれたのがまさにここ静岡の街。



杉村　孝
SUGIMURA Takashi

題名：石を彫る
素材／技法：インスタレーション・DVD
大きさ：500×500cm
発表場所：青葉公園

三角小屋に石を彫る映像をエンドレスで終日放映。その彫った石片（コッパ）を小屋の前に5メートルの丸に敷きつめ中心に球体のみかげ石を磨いて置いた。DVDは、2000キログラムの石灰岩を3ヶ月間彫り続けて、石片（コッパ）にしてしまう映像である。

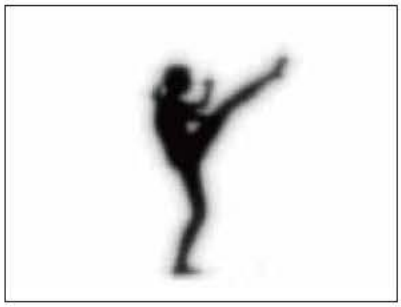
63年前、焼津の漁船第五福龍丸がアメリカの水爆実験で、大量の石灰岩の粉末と放射性のチリ「死の灰」をかぶって船員全員が被爆した。核兵器廃絶を訴える。

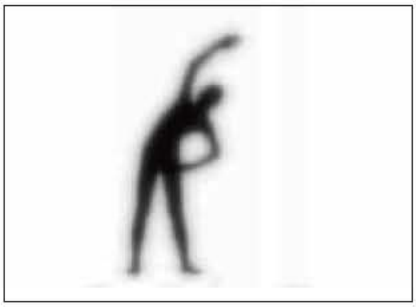
杉森順子
SUGIMORI Junko

題名：MOVE./
素材／技法：ビデオ
発表場所：静岡ピカデリー屋上プラネタリウム

いつも少女に寄り添わなくてはいけない「影」は、ちょびり退屈していました。たまには、一人で自由気ままに動いてみたい…。イスにかけてまどろみはじめた少女。夢うつつの少女の「影」は、いつも間にかこっそり抜け出して自由奔放に動き始め、ドーム天井を飛び回ります。

プロジェクター 3 台を使って出来た大型スクリーンの中で、影は変幻自在。つかの間の自由を楽しんでいます。肩肘張らずに、気軽に眺めて、シンプルでコミカルな影の動きに微笑んで見てください。





鈴木亘彦
SUZUKI Nobuhiko

題名：時粒ーいかもの
素材／技法：ガラス、はんだ、合成樹脂、顔料、空気
大きさ：30×30×20cm
発表場所：浮月楼ギャラリー

「見えないものを観えるようにする。」私の気にしていることのひとつです。空気（音、におい、空間）や時間（思い出、印象）などはあたりまえに存在し自然と見過ごされ何かの拍子に記憶として気付くようです。

銭谷　均
ZENIYA Hitoshi

題名：樹色（ジュショク）
素材／技法：ゼラチン・シルバープリント
大きさ：54×43cm
発表場所：ミカサ写真館

富士山の南面、標高1500m位の温帯の落葉樹林から感じられる樹々の生命力や自然林の魅力をモノクロームで表現した作品です。

田宮話子
TAMIYA Wako

題名：香久の国
素材／技法：日本画
大きさ：53×45.5cm
発表場所：浮月楼ギャラリー

題名：紅い花
素材／技法：日本画
大きさ：53×45.5cm
発表場所：浮月楼ギャラリー

ここ、数年に渡って描き続けている「楽園」に佇む女性像を二点出品しました。背景には、橘の樹、実りを迎えた田園風景が広がり、どちらの作品にも「実り」が共通のモチーフとなっています。岩絵の具の質感を生かして、装飾的に表現しました。

夏池　篤
NATSUIKE Atsushi

題名：対局≪王のように考え、奴隷のように働く≫
素材／技法：石、鉄板、蓄光材　等
大きさ：15×700×700cm
発表場所：青葉公園

碁は古くは戦国武将により戦略シミュレーションをかねたゲームとして行なわれた。今回は碁の戦略的思考に加え、大きな石を使用することでその移動に伴う肉体的苦痛を味わい、戦場において前線で戦う歩兵の大変さを身を持って感じる作品である。題名は彫刻家ブランクーシの言葉からの引用で、彫刻家が誰に拘束されることなく崇高に作品を考えると同時に、そのアイデアに従って奴隷のように身を粉にして制作に励むことをもじったものである。都会の公園での作品展示であったため、通りすがる人たちと作品を通してどのように関わるかをテーマとした。

丹羽勝次
NIWA Katsuji

題名：～景色～LANDSCAPE
素材／技法：自然石（50個）、空色のネオカラー、円周1.3mの白いビニロンロープ50本
／インスタレーション
発表場所：青葉公園

・・・そのとき、青葉公園の場そのものが景色のインスタレーションとなる。そこに、もう一つの景色を挿入する、仮説。もう一つの景色は、50人の市民に円周1.3mのロープと自然石１個を、公園の任意の場所に置いてもらうことによって形成される。

蜂谷充志
HACHIYA Mitsushi

題名：07View Toraya Plan -An invisible thing…Laser horizon-
素材／技法：Mixed Media／自家栽培ひまわり、再生紙、蜜蝋、顔料、レーザー
大きさ：160×180×160cm
発表場所：ラッグトラヤ

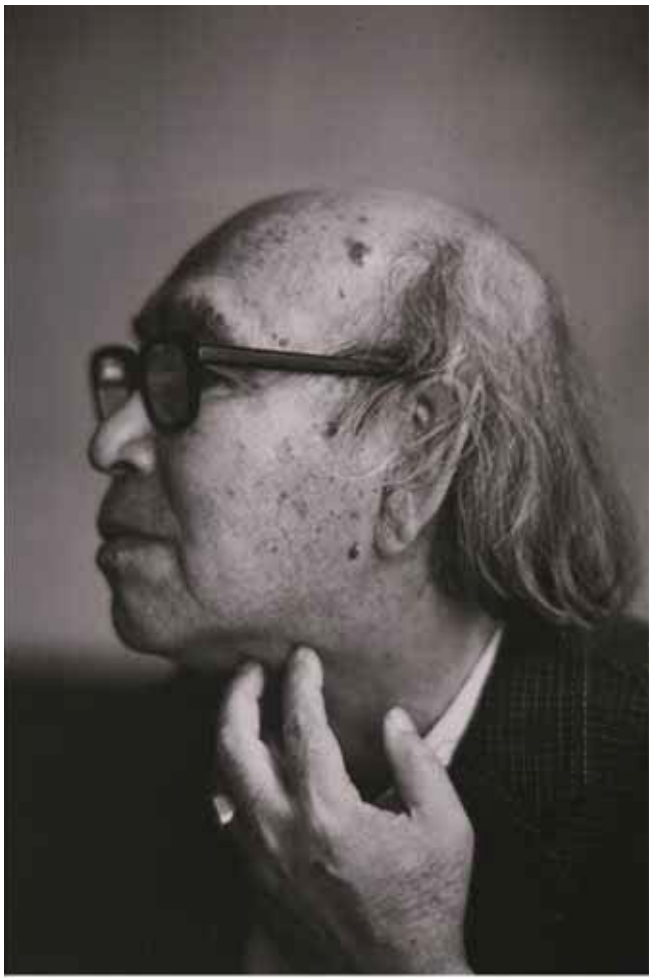
松浦峰里
MATSUURA Mineri

題名：grass
素材／技法：鉄、木
大きさ：40×40×20cm
発表場所：浮月楼ギャラリー

支持体に一つ一つのワイヤーを植え込む作業は田植えにも等しい、太陽の注ぎ込まない密集の中から単子葉類の瑞々しい葉が伸びてゆく、異素材を使用して植物の生命力を二つの角度から表現した作品である。

松野　崇
MATSUNO Takashi

題名：人物
素材／技法：アナログ銀塩　ネガプリント
大きさ：全紙
発表場所：ミカサ写真館



肖像と風貌

人物表現には状況描写と共に絵の中に文章を隠して読ませる場合と作者の心の感動をもってカメラを絵筆の様に平面に置き換え人物の人間性までも写し撮る場合がある。人物の記憶性は写真の大切な部分であるけれど肖像作品となると別である。風貌は人間のリアルな表現と光と影の造形も加味するのである。

持塚三樹
MOCHIZUKA Miki

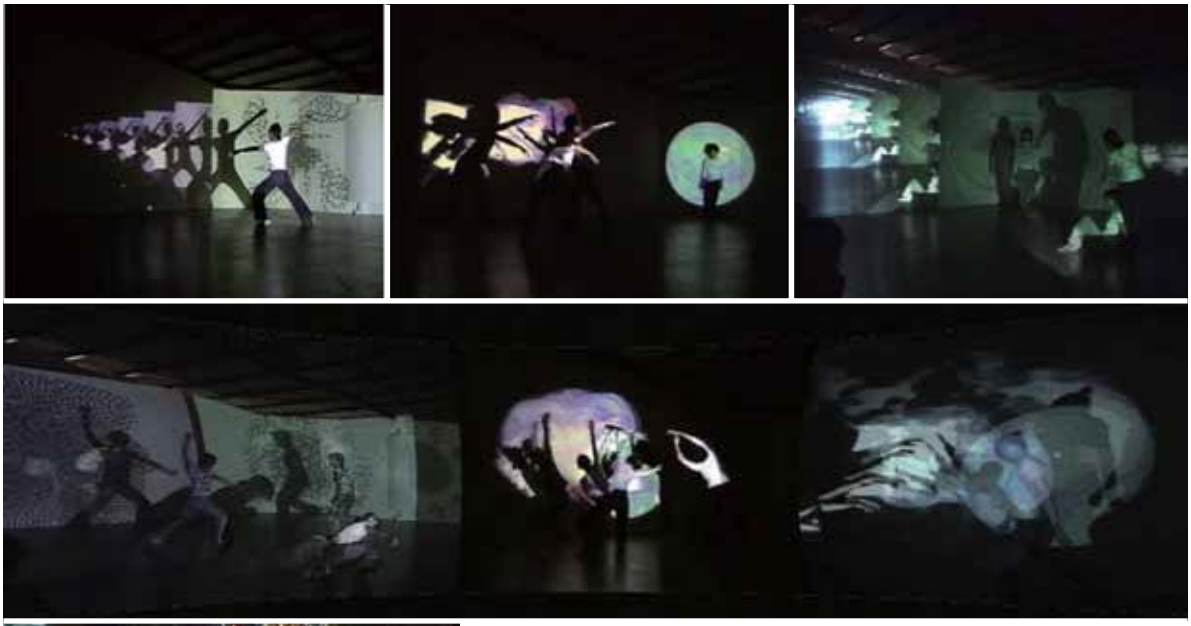
題名：chain
素材／技法：紙にアクリル
大きさ：80×8.5cm
発表場所：サバイディール

題名：home
素材／技法：紙にアクリル
発表場所：サバイディール

山内啓司
YAMAUCHI Keiji

題名：time-space
素材／技法：ビデオアート
発表場所：静岡ピカデリー屋上プラネタリウム

プラネタリウムの曲面に投影された三つの映像。時間のずれによる、光の増殖作用で作り出されるパターンに、その映像を身体に投影されたダンサー達と、シンセサイザーによる即興演奏が加わる。時間の異なる三つの映像は、それぞれが互いに干渉し合い、関係し合い、意識や記憶のような重層的空間を作り出す。



インゴ・ギュンター　Ingo Gunther 講演会報告

蜂谷充志

演題：アートと世界
　　－インゴ・ギュンターの仕事から－
日時：2007年１月14日（日）　13:30-15:00
場所：静岡銀行呉服町支店８階
　　しずぎんホールユーフォニア
　　入場者数　110名

企画：蜂谷充志
協力：Ｐ３　art and environment
　　（芹沢高志、伊藤忍）
通訳：アンドリュー・シュティルブ
　　（Andrew Schtirbu）

打ち合せ中のインゴ・ギュンター氏（写真右）

講演会風景

アートドキュメント2007に併せて、世界的に活躍中の現代美術のアーティスト、インゴギュンター氏の講演会を行った。当時、氏は東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科の客員教授として日本に滞在中で、実行委員会の企画内容をご理解いただき、幸運にも講演会が実現した。現代美術の領域で、世界的に活躍のフィールドを広げている作家より生の話を聞ける機会は、常大や静岡市にとって大変貴重な時間となった。

アートドキュメント2007は、常葉学園大学造形学部の教員たちで実行委員を組織し、開催された。開催趣旨の一つに「芸術の現場を通しての教育」があり、常葉学園大学造形学部学生11名が、企画、広報、会場の運営に積極的に関わり、ギュンター氏と貴重な出会いをかみ締めた。

先ず、インゴ・ギュンター　（Ingo Gunther）経歴を紹介する。インゴ・ギュンター　氏（Ingo Gunther）は、1957年、旧西ドイツ、ハノーファーに生まれる。現在はニューヨークを拠点に活動している。ゲーテ大学で民俗学と文化人類学を修め、続くデュッセルドルフ美術大学ではナム・ジュン・パイク（注１）のアシスタントを勤めながらアートの手法を学んだ。

活動初期には当時、素材としてきわめて新鮮だったビデオやランドサット衛星画像などを作品表現に取り入れ、1984年に『ヴェネチアビエンナーレ』（イタリア）、1987年には『ドクメンタ８』（ドイツ）などの歴史ある国際現代美術展に招かれ、大きな注目を集めた。日本では、2002年とかち国際現代アート展『デメーテル』、2005年に『横浜トリ　エンナーレ』などに出品している。その他、国際舞台での展覧会を多数開催。静岡では、九州大学の「こどもプロジェクト」による『ワールドプロセッサー展　子供に伝えたい地球108の顔』を静岡科学館る・く・るで2005年に開催した。また同年は、足立区北千住に移転した東京芸術大学音楽環境創造科が中心となって展開する公開プログラム、「千住アートプラットフォーム2006」の一環として、『インゴ・ギュンター展覧会　―トポロジー・ドライブ-理性、信仰、政治を超える地平―』を開催した。

美術展以外にも、東西の壁が壊された直後に旧東ドイツで海賊ラジオ局の開設に携わり、イタリアの寒村では初期のインターネット・コミュニティの実験に加わるなど、直接社会と関わっていく活動も行っている。世界経済フォーラムにも招かれ、国際外交を研究するなど、グローバルスケールの思考と行動力で活躍している。

ケルンのメディアクンストアカデミー、東京芸術大学などで教鞭をとり、後進の学生たちにも、多大なる影響力を与えている。

「Worldprocessor 1988-2006」※１

「LAND - Pacific Rim 2005」※２
（※１、２）写真提供：Ｐ３ art and environment

講演会は、氏の代表作から最新作まで、写真と映像を使って、作品の意味するところをわかりやすく、彼自身の解説により、話を進めていただいた。

88年から制作し続け、現在では300を超える作品群となった、地上のあらゆる諸相をイルミネーションの地球儀上で提示した「ワールド・プロセッサー」は、地上の様相を、たとえば、地上と水の量、核爆弾を保有する国、人口密度、エイズ患者数、などなどきわめて今日的な社会問題を、中心から発光する地球儀を使って視覚化する強いメッセージ性を持った芸術的な作品。

横浜トリエンナーレ出品作「LAND - Pacific Rim 2005」は、鑑賞者が非日常の地点に身を置いて、地表の７割を占める海から、自分たちの住む陸地を眺める作品。船に乗って海上から陸方向に近づいていくとき、最初に目に入るのは青みがかったグレーの山並みで、そして徐々に人工的な建造物、波止場や工場、港町の建物群などがはっきりと見えてくる。最初に人間が認識する地勢、それがこの作品の提示するイメージとなる。実際の画像制作は、数値データを元に海抜０メートルの水平線から陸の標高をグラフィカルにレンダリングして高低を出現させており、たとえば日本付近を注意してみると富士山の特徴的な形を確認することができる。

また、世界中に広がる難民たちを、国家の枠組みを超えた仮想共同体とみなして展開した「難民共和国」プロジェクトなど、ジャーナリズムとアートを結び、国家、テクノロジー、個人、メディアを取り巻く諸問題へと話は進んだ。

膨大な作品は、どれも視覚的に美しいものでありながら、国家や国境を越えた地球という視点、つまり人類の過去や未来を浮かび上げる一連のものであった。

「あらゆる制約から自由でいるために、表現手法として“アート”を選んでいる。」という彼の言葉が印象的であった。

サインに応じるインゴ・ギュンター氏（中央）

スタッフと記念撮影

最後に、本講演実現にあたり、多大なるご協力を頂いた、Ｐ３ art and environme代表の芹沢高志様ならびにディレクターの伊藤忍様にこの場を借りて、感謝を申し上げる。

注１）ナムジュン・パイク（Nam June Paik 1932年７月20日－2006年１月29日）は韓国系アメリカ人の現代美術家。ビデオ・アートの開拓者であるとともに、その代表的な存在である。

ミニシンポジウム：「街をデザインするって何だろう」

土屋　和男

このミニシンポジウムは、静岡の街を都市形成史から確認し、中心市街地を敷地とした環境デザインコースの学生の提案を通して、都市デザインとアートの観点から静岡の街の可能性を探ることを目的としたものであった。

構成は大きく３部に分かれ、概要は次のとおりであった。

日時：2007年１月20日（土）　13:30-16:00
場所：教覚寺会館（青葉通り沿い）

１．趣旨説明と静岡の都市計画史
土屋和男：常葉学園大学造形学部助教授（建築史・都市形成史）

２．プレゼンテーション「駿府・モダン」
常葉学園大学造形学部環境デザインコース３年生

３．パネルディスカッション
栗田　仁：栗田仁建築設計室代表（建築設計）
島村芳三：Shimamura建築研究所代表（建築設計）
長谷守保：長谷守保建築計画代表（建築設計）
神津宏昭：コーズデザイン、常葉学園大学造形学部教授（プロダクトデザイン）
土屋和男：コーディネータ

１．趣旨説明と静岡の都市計画史

第１部は、静岡アートドキュメントのなかでのミニシンポジウムの位置づけと眼目、および当日の構成を説明の後、静岡の歴史を建築、都市計画の観点から解説した。やや長くなるが、静岡の街を舞台にするにあたっての歴史的基礎となるものなので、以下に掲げたい。また、この第1部での内容は、第２部の提案にあたっての前提となるものでもあった。

現在の静岡の街の形は、徳川家康による駿府城とその城下町の造営が基礎となっている。この計画は江戸期都市建設の頂点をなすものであり、特に富士山の景観が街全体の形を決定していることが特筆される。1604（慶長９）年に将軍職を譲り大御所となった家康は、２年後に駿府を隠居先と定め、翌1607（慶長12）年から駿府城の築城を、諸大名を集めた天下普請によって行い、この年に居城が落成した。奇しくも今回のアートドキュメントが行われた2007年はその400年後にあたる。家康はこの造営で、安倍川から北東に向かう東海道を本通から新通へとつけかえ、その正面に城の天守を配した。新通の軸線はほぼ富士山への方向と一致している。すなわち東海道を西から東に（京都から江戸へ）向かう者は、正面に天守がそびえ、その背後に富士山を背負うという劇的な景観を眼にするわけである。駿府の街はこの景観をもとに街割がつくられたので、街全体がやや北東に傾いている。街割は正方形の街区が整然と並び、当時としてはきわめて広い街がつくられた。こうした景観演出および都市計画は桃山時代から見られた城下町計画のなかでももっともスケールの大きなものであり、城の役目が軍事拠点から権力の象徴へと移ったことを示すものであった。駿府は全くの平城であり、戦いに適した地形ではない。その代わりにはるかに遠い富士山を都市計画に取り込んだことで、街全体が富士山に守られるような壮大な景観を実現させたのであった。そしてこのときにつくられた街の骨格は現在もはっきりと残っているのである。

近代になり、駿府が静岡となってからの大きな都市改造では、1889（明治22）年の東海道線静岡駅の開業が重要である。既存の街割を残したまま、呉服町通りの延長上に駅を配した。江戸期以来の街の目抜き通りが近代の玄関口となる駅と直結し、期せずして近代における発展を準備した。現在、全国でもまれに見る中心市街地の賑わいは、このときの駅と市街地との位置関係が重要な要因であろうと思われる。1900（明治33）年には和風の静岡御用邸が今の市役所新館の敷地につくられた。御幸通りはこれに由来する名称である。さらに静岡銀行本店、市役所、県庁など、今でも多くの人が静岡を代表する建築として筆頭に挙げる様式建築がつくられ、近代化が目に見える形となっていった。1940（昭和15）年には静岡大火が街を襲った。中心市街地のほとんどを焼失したこの大火の復興計画で、現在の青葉通りがつくられた。これは36m幅の防火帯である。同時に正方形であった街区の東西方向に背割り道路を通し、現在の長方形の街区となった。今でも東西方向の街路を見ていくと幅が広狭広狭となっており、狭い道がこのときの背割りでできたものであることがわかる。1945（昭和20）年の大空襲を経て、戦後の復興計画として昭和31（1956）年、呉服町通りを防火建築促進法に基づく共同建築事業で建て替えた。これは当時、全国初の事業であり、現在も高さと壁面がそろった共同店舗が連続している。ほぼ同時期には今回の会場のひとつにもなった七間町の映画館街がつくられた。これらは今や建設後約50年を経て、貴重な遺産となりつつある。

このように静岡には都市計画的に全国的に見てもきわめて特徴的なトピックがいくつもある。にもかかわらずこうした歴史は市民にも意外と知られていない。街が変貌し、計画時の姿が見えにくくなっていることも一因であろう。しかし、建築の姿は変わっても、街の骨格はほとんど計画時のままである。こうした街の歴史、特にその造形的な歴史を知ることは、街と関わるアートを目指す者にとっても、その展示場所を知るばかりではなく、作品制作の上でのヒントともなろう。

２．プレゼンテーション「駿府・モダン」

第２部は学生たちが自らの作品をプレゼンテーションした。静岡アートドキュメントにあわせて９人の学

生が約3畳大のパネルを制作し、静岡中央郵便局1階ホールに展示したものについてである（学生作品　環境デザインのページ参照）。静岡の中心市街地、呉服町通りと青葉通りを構想の舞台と決め、「都市をデザインすること」を課題とした作品である。

この作品を考えるにあたって確認したことは、「都市をデザインすること」は建築や道路を考えることでは必ずしもない、あるいはベンチやバス停などの配置や形そのものを提案することでもない、ということである。では「都市をデザインすること」とは何だろうか。それはまず都市での出来事を考えることだ、ということが出発点となっている。都市での出来事とは大づかみに言えば、歩いて楽しい／季節を感じる／雨の日が楽しい／催しがある／車に勝つ…、などのことである。これらを具体的に実現するためのストーリーを考え、そこに何らかの物（都市装置）が介在することで、その出来事を発生させることができれば都市はデザインされるのではなかろうか。例えて言えば、少し変わった人が街を歩けばそれだけで街はデザインされる、しかし、それだけでは突発的すぎる、何らかの物を通してその出来事を意図的に誘発させることができれば、「都市をデザインすること」になるのではないか、ということである。物（都市装置）としては、ストリート・ファニチャー／植栽と街路樹、花壇／屋台、ワゴン／舞台／看板、案内板／車止め／メディア・アート…などになるかもしれない。しかしそれらは、あくまでも都市に出来事を発生させるための道具である。こうした認識の下に各学生が行った提案は以下のようなものであった。

- 商店街の看板の大きさや規格を揃え、街にリズムをつくりだす。
- 絵の描いてある傘を貸し出し、それをさした人が歩くことで雨の日を楽しくする。
- 常磐公園近くに仮設市場を設営し、ある時間のみ賑わいをつくる。
- 街のさまざまな音を採集する。筒を設置して、料理の音や人のざわめきを聴く。
- 人が歩くことで街に花を増やす。花を持ちやすいバッグ、花を持つと割引になるしくみなどによる。
- 青葉通りに屋台を並べる。小さな空間の親密性を活かし、食事を通してコミュニケーションが生まれる。
- 青葉通りに人の動きに反応するメディア・アートを設置する。
- 傘の林をつくる。雨の日にカラフルな大きな傘を並べ、季節に応じた色のパターンをつくる。
- 青葉通りに子供が自分の植木鉢を設置できるようにして、地域の老人とともに育てる。

こうしてつくられた作品は共通して学生の身近な感覚から構想され、どこか懐かしさを誘うものとなった。現代の生活が忘れかけているこの感覚を表現するものとして、全体のタイトルを「駿府・モダン」とした。人の行為が出来事をつくり、街をデザインする。このプレゼンテーションは、「街をデザインするって何だろう」というミニシンポジウムのタイトルに対する問題提起でもあった。

3．パネルディスカッション

第3部では建築・プロダクトデザインの専門家が、第2部の学生作品を批評することが緒となった。そこで挙がった意見は例えば次のようなものである。

- 全体にローテクな提案が多く、それがいい。サスティナビリティの観点からも、こうした提案は望ましい。
- 不可能な計画をするのではなく、身の丈にあったところから街に興味をもつ姿勢が見られた。
- 第1部で解説のあった静岡ならでは、という部分があればもっとよい。
- 静岡は豊かで、人がのんびりしている。それが長所でもあり、短所ともなる。それが人の行動、車の運転、商店街のあり方、物価などに現れている。まずは静岡の人が自覚すること、また自覚させるしかけが提案できればよい。
- 市民が街や建築のさまざまな問題点に気付き、少しずつでもよくしていこうと思うことが大切。アートはその重要なきっかけとなりうる。

こうしてはじまったディスカッションの内容は多岐にわたったが、概括すると3点ほどにまとめることができよう。

第一は静岡の街の特性についてである。静岡では現在でも商店街が力をもち、中心市街地の賑わいをつくりだしていることは全国的にも有名である。地方都市がクルマ社会となり、各地で中心市街地が郊外店に客を奪われている現状において、静岡市の活気は注目される。このことは、海と山が近く土地の少ない地形的特徴と、同質的で団結力の強い商店街の性格が重なって生まれたものである。これらの条件はときに街にとってマイナスともなりうるが、海のものも山のものも手に入る自然条件としても、東海道の大都市間にある経済的条件としても、豊かで恵まれた地理的環境が有利にはたらいている結果と思われる。静岡の人はおとなしく、値切らないと言われる。これが全国的に見ても非常に高い地価などにもつながっているが、逆に見れば値切らなくても暮らせる豊かさがあるということでもある。しかしこの豊かさを享受するあまり、積極性に欠けることも静岡の気質である。これらは特に同じ県内の浜松と比べると一層わかりやすい。浜松が徳川家康の出世した土地であるのに対し、駿府は家康公の隠居先である。こうした気質はこれまでもたびたび語られてきたが、それらが街の個性に、とりわけ形の個性につながっている例は多くない。歴史的に培われてきた街の気質は簡単に変わるものではない。これを変えるのではなく、よりよい方向につなげ体感できるようにするしかけが、これからの都市デザインに求められている。

第二はこのアートドキュメントの主旨でもあるアー

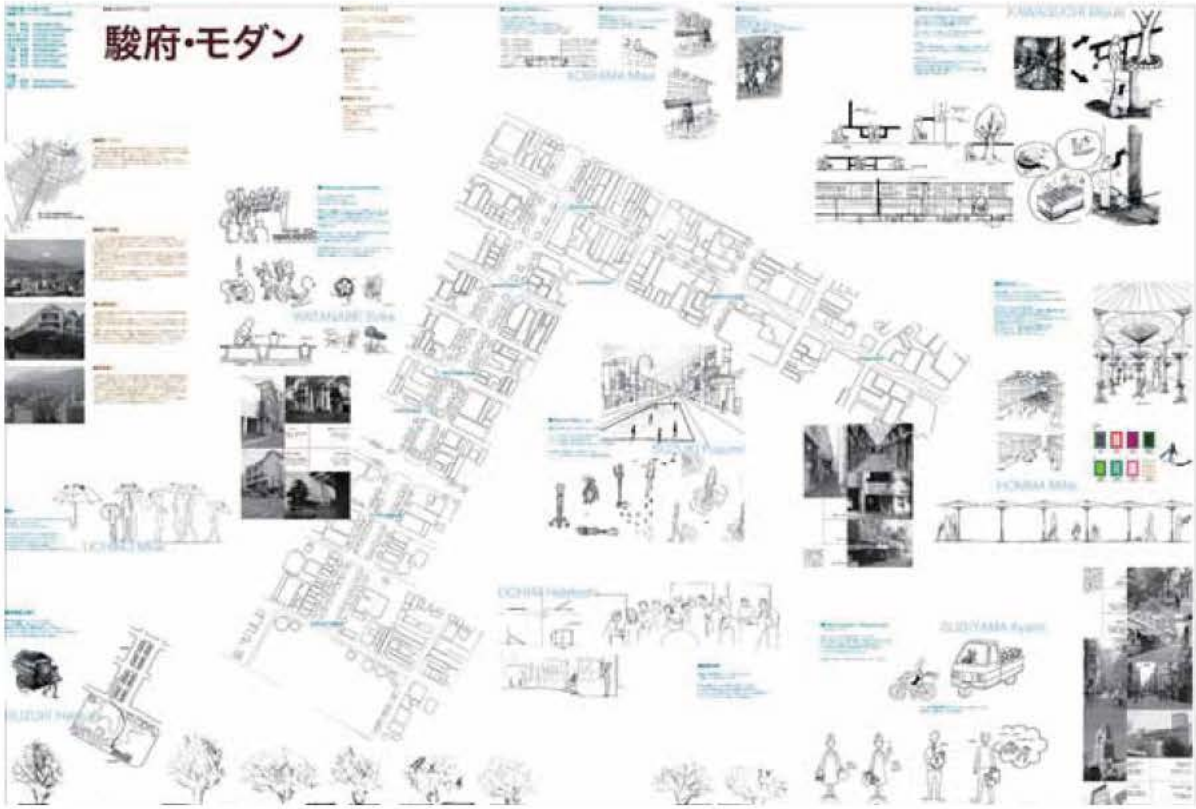
トによるまちづくりの可能性についてである。第2部で述べたように、出来事のデザイン＝都市のデザインという考え方が成り立つならば、アートは出来事を誘発する都市装置として大きな可能性をもっている。アートはなによりも好奇心をドライブする物である。それが街歩きをするとりあえずの目標となり、ついでに街の景観を目にして街を知ることにもつながる。また、それらが街に点在されれば、それを巡って歩く楽しみになる。それらはことさらに目立つ必要はない。むしろ密やかに慎ましく存在することで、街の秘密を知るような感覚が演出できないだろうか。それらを巡ることは街のオリエンテーリングであり、街に隠されたコレクションを歩く大きな美術館ともなる。もちろんこうしたことを可能にするアートは、街を理解した作者による、その場所ならではの作品でなければならない。少なくとも、作者が街を解釈し、それがそこにあることで街に好奇心を生み出すような作品でなければならない。こうしてつくられたアートは、街に突発性を与え、それを辿ることで人々の参加性を促し、それらを巡る回遊性をもたらすのである。

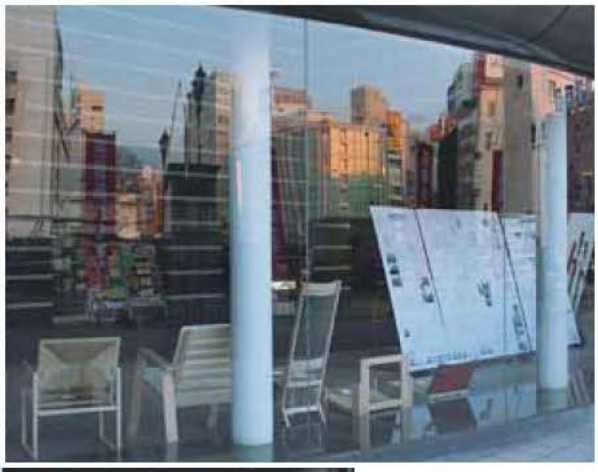
第三は現代における地球規模の課題であるサスティナブルな街と生活のあり方についてである。近代の都市計画はクルマの便利さを信じて疑わず、道をまっすぐにし、どこも舗装し、路地や横丁を駆逐してきた。これをひとつの影響として地方都市では中心市街地が衰退し、郊外に大型のショッピングモールやロードサイド店が出現することになった。流行語ともなった『下流社会』の著者、三浦展が述べるように郊外の光景は歴史の厚みをもたず、人々がクルマからダイレクトに店に入り街を歩くことがない「ファスト風土」である。郊外化の問題はさまざまに指摘されるが、問題をエネルギー効率だけに限ってみても、1人の移動に1台のクルマが動く社会は明らかに非効率である。これだけでも中心市街地を人が歩いて移動できるコンパクトシティの説得力がある。そして静岡にはそれができるだけのポテンシャルがあるのである。クルマ社会にもとづいた「ファスト風土」の最も重要な問題点は、スケールもスピードもクルマのそれになっていることである。そこには人間の身体をもとにした感覚が根本的に失われている。たしかにわれわれの生活には、物資の供給をとってみてもクルマは不可欠である。しかしクルマの便利さを疑ってみること、同時に人間的な身体の心地よさやスケールを大切にすること、そこにサスティナブル・ディヴェロップメントを可能にする鍵があると考えられる。クルマがなかった時代から数百年にわたる歴史をもち、中心市街地に活気があり、横丁がいくつもあって小さな店が満員になる静岡の街には、人間の身体にもとづいたスケールが息づいている。満員になった小さな店では、知らぬ者同士でも肩が触れあい、カウンターを譲り合い、自然と言葉を交わすのである。これは空間が出来事を誘発しているよい例である。そしてこれを可能にしているのは、街の密度と、なによりもそこに人がいるという事実なのである。

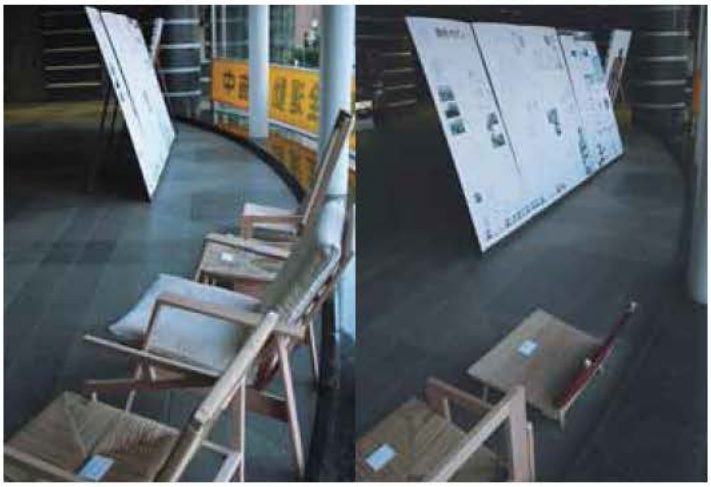
以上、ミニシンポジウム：「街をデザインするって何だろう」の様子を報告した。第1部は第2部には直接影響してはいなかったが、第3部の討論を通して、全体の趣旨を明らかにし、街のなかでのアートの可能性も示すことができたと思う。今なぜ、ここで、こうしたことを行うのか、についてのひとまずの回答はできたのではなかろうか。

学生作品 ＜環境デザイン＞

会場：静岡中央郵便局１階ホール、LOFT（青葉通り、家具・雑貨店）
作品展示学生：青島美早、内野未来、落合秀年、川口美幸、杉山絢美、鈴木はつみ、鈴木芙由美、本間美穂、渡辺えりか

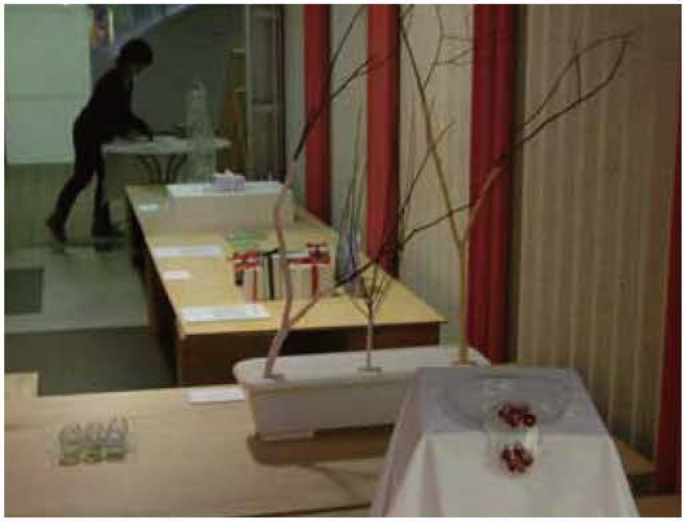






学生作品 ＜立体造形＞

会場：静岡市紺屋町地下空き店舗
作品展示学生：石川美澄、奥田千紗子、加瀬かおり、久保田眞生、澤村友子、瀬戸尾拓也、津田翔、寺田香織、福島優



学生作品 ＜平面造形＞

会場：静岡市紺屋町地下空き店舗

作品展示学生：麻川桃子、芦澤有里、川端陽介、鈴木佳織、杉田侑子、名波一巳、加茂見奈子、杉浦正樹、高橋望、竹田潤一、竹山朗、辻岡志穂、中島充喜、永野亜弓、福井佑介、前島準一、前島めぐみ、宮崎恵梨、向島小百合

静岡アートドキュメント2007における告知媒体デザイン

杉田達哉

静岡アートドキュメント2007において、視覚伝達デザインコースでは告知のためのポスター、チラシ、ホームページ、インゴ・ギュンター講演会ポスターなどのデザインを学生が中心となって担当した。また、展示作品についても杉田によるアクリル作品、学生によるフィンランド、オーストリアのデザインレポートなどで参加している。

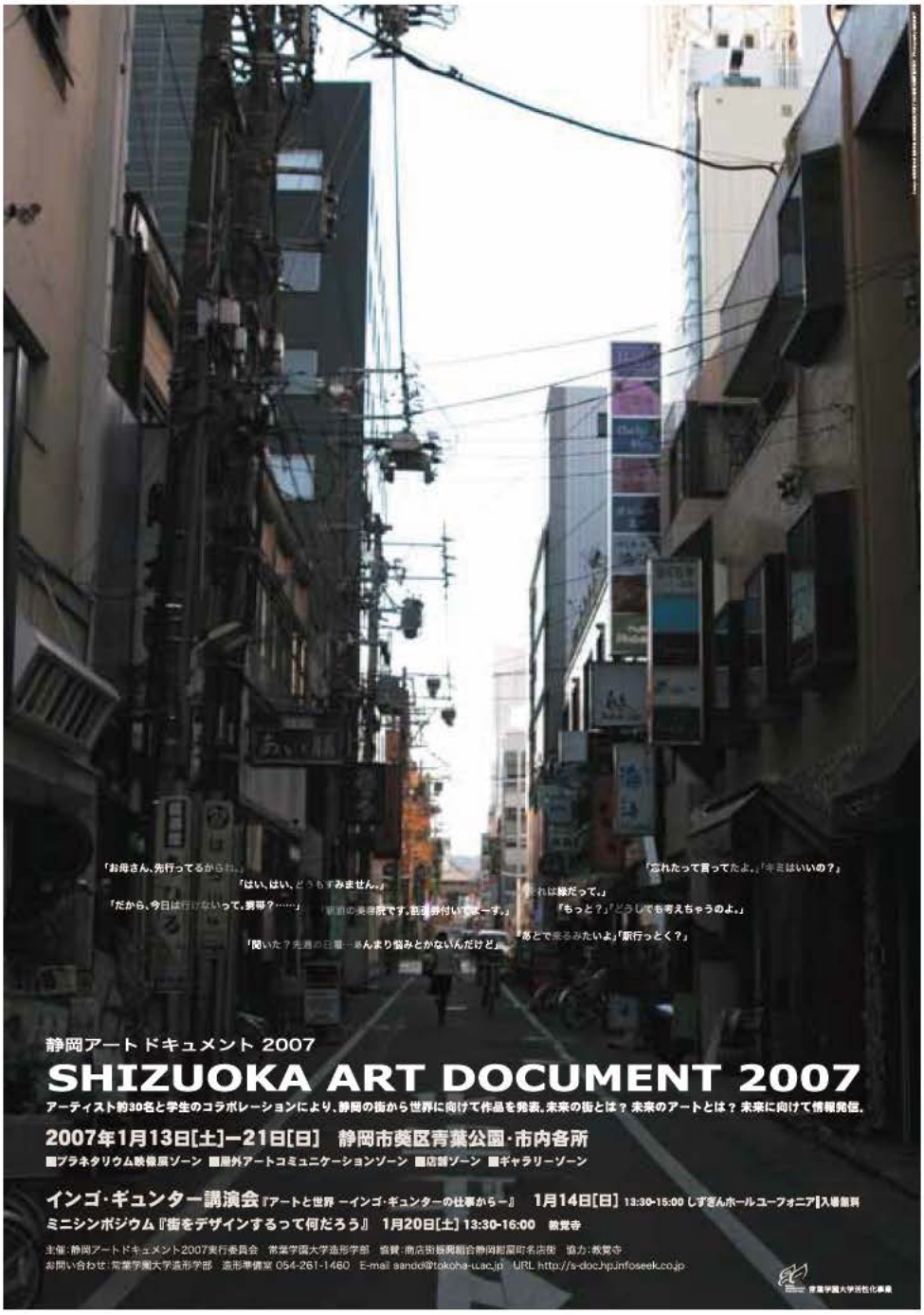
メインのポスターデザインは数人の学生によるコンペ形式とし、幅広いアプローチの中から選定された。このポスターではアートイベントとしての告知の機能は最小限に留め、ポスターそのものが街とアートの融合された表現を訴求するものとし、静岡のどこにでもあるような路地裏の写真と、そこに浮遊する日常の会話をサンプリングして構成している。

［参加学生］

造形学部　視覚伝達デザインコース　3年生（2007年1月）

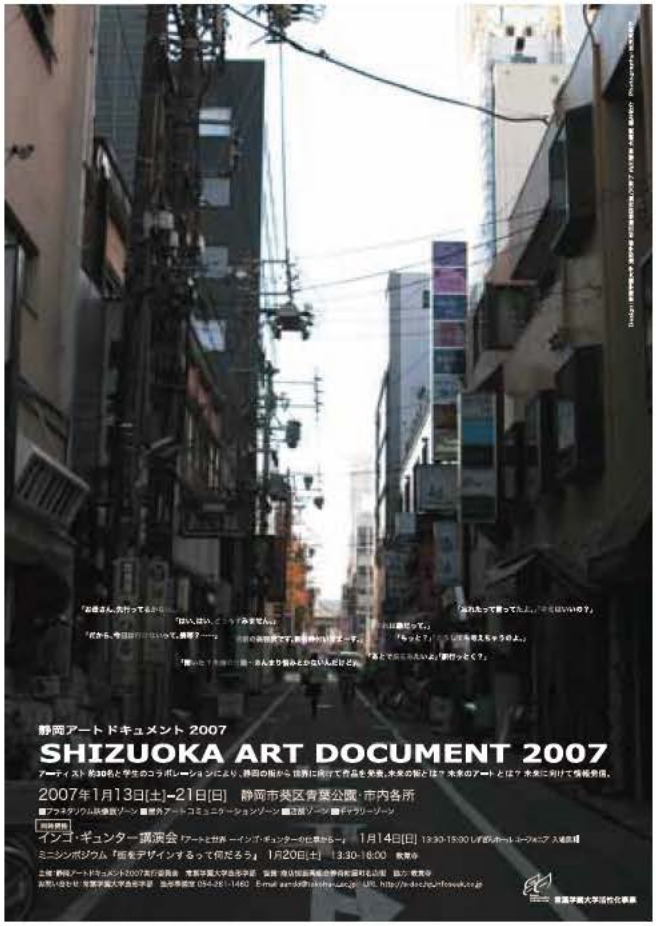
天野了／内川智裕／大橋愛／加茂見奈子／福井佑介

■ポスターデザイン



写真：加茂見奈子　　728mm×515mm

■チラシデザイン



静岡に生活する人々とアーティストと学生がコミュニケーションをとりながら、その都市環境を作品化するという試みは、静岡の町の歴史を掘り起こすと同時に新しい資産を与え、その地域でしか醸成することのできないアートの発信を可能にすると考えます。

また、社会とアートの関係を作品化する革新的メディアアーティストのインゴ・ギュンター氏をお招きした芸術講演と、静岡の街を気軽に語りあうミニシンポジウムを企画しました。

これらのイベントが未来の静岡を考える上で何らかの手掛かりになることを願い、静岡アートドキュメント2007を開催いたします。

インゴ・ギュンター講演会『アートと世界 ―インゴ・ギュンターの仕事から―』 入場無料

日時：1月14日(日) 13:30-15:00
場所：静岡新聞静岡駅北出張所
しずぎんホールユーフォニア ❼

インゴ・ギュンター Ingo Gunter ●1957年ドイツ生まれ。アーティスト、ジャーナリストの経験を持ち、メディアアートの革新者として多大な影響力を持つ。地上のあらゆる識別をイメルエ・キーションの域横断上で図ゆした30年超えるの巨部プールドプロジェクト、世界中に広がる電気ちを国境の壁超かを越えた仮想共同体とする「無国籍国家」プロジェクトなど、ジャーナリズムとアートを結び、国家、テクノロジー、個人、メディアを絡ち著く関係性を可視化する、世界経済フォーラムとも結ばれ、国際先定を研究するなど、グローバルスケールの活動を幅広く展開する。現在、東京芸術大学音楽環境設計科教授。

ミニシンポジウム「街をデザインするって何だろう」

日時：1月20日(土) 13:30-16:00 場所：教育棟 ❹

参加者自身に、街の歴史、活、景観、そして、楽しさ、誇りか、魅力などについて語り合います。

●プレゼンテーション
常葉学園大学造形学部3年生環境デザインプロジェクト 「静岡 モダン」
●パネリスト
黒田仁 黒田仁建築設計室代表/長谷守雄 長谷守雄建築計画代表
島村芳広 Shimamura建築研究所代表
神原宏明 コーズデザイン、常葉学園大学造形学部教授
●コーディネーター 土屋和男 常葉学園大学造形学部准教授

プラネタリウム映像展ゾーン
静岡ビカデリー屋上プラネタリウム ❷
12:00-18:00

奥中章人「world-roof garden」
「廃墟ノ風」七間町で　その町並みの上で　その場所を基う　この街を空間を創造　知らない町並みを創造し。
(インスタレーション・映像)

長船恒利「プラネタリウムでムービーを」
プラネタリウム・ドームの空行風スクリーンに、3つの物語が同時進行するマルチスクリーン映像。(映像)

杉森順子「MOVE!」
動がつくりだす不思議ワールド。(映像)

山内啓司「time=space」
プラネタリウムの曲面に映し出された、歪められ引き延ばされた時空間。(映像)

屋外アートコミュニケーションゾーン
青葉公園 ❸
11:30-18:00

石上和弘「新宿牛-A cow in shinjuku-」
新宿に居をもった起源ゆえ、ここ青葉公園で自に触れた牛。メキシコ、メリダ市に展示します。(彫刻)

長船恒利「パフォーマンスin CAVE」
長船CAVEがギャラリーで展開している発展・映像・ダンス・音楽の作品と記録に関する映像を展示する。(映像)

岐部琢亮「THE PRESENT STATE」
囲まれた空間であるとの中、中心に引き寄せられるような作品を展示。(彫刻)

柴田美千里「太陽を捕める」「おさんぽべろ貸し出し」
こがねいを連れて渋谷の広神作品を見て回ってもらおうと思っています。(立体)

杉村 孝「石を動る」
たたなを重ね合わせその行為は虚しいだろうか、旅行無常あるが故に無尽蔵現象。(立体+映像)

丹羽勝夫「LANDSCAPE～景色～」
その時、世界の様子のものが変色のインスタレーションとなる。そこにもう一つの景色を浮べる。(絵画)
(インスタレーション)

夏池 篤「対峙(王のように考え、奴隷のように働く)」
鉄板による8.5m×5.5mの画面のグリッドを設置し、四角い石と丸い石で語の対話をおこなう。(立体)

山内啓司「lift=tree」「cave映像記録」
ギャラリーCAVEで実施されたプロ間の四面見解と、会期内の様々の同に投影される映像。(映像)

店舗ゾーン

内海健夫「ある情景」―Un tissu ❻
表皮は私の知覚、感覚、情緒、観察を通して少しずつ変化している事を伝えてあります。(平面)

蜂谷充志「View 07 Tarayo Plan -An invisible Ship-」― トラヤ ❺
1月13日(土)-17日(水)
視界から消えるところに、視界はじめる。見えてくるものは、見えてなくなる。(インスタレーション)

持塚三樹「chain」― サバイディール ❾
いつも見る風景、その風景の中には、静そばいくらでも面白いものが現見できる。(小さな彫刻作品もの小さな絵画)

常大立体メディア学生、平面学生、研究生
― 静鉄市地下商店街空き店舗 ❿

常大環境デザイン学生
― LOFT ❽

ギャラリーゾーン
11:00-18:00

加藤和夫「伝言」― ミカサ写真館 ❶
あるがままくらい思いを残すドレーズで語っていた。そしてやまた残けてみる。(写真)

鈴谷 均「鋼色(ジュシャク)」
― ミカサ写真館 ❶
富士山の雲木の変化です。(写真)

松野 崇「結晶」― ミカサ写真館 ❶
写真のやのもう一つの世界が表現できたらと思いつつ制作している。(写真)

安部一博「対峙―記録 05'1」― 厚月樹 ⓘ
流すまった時間を体験することは二度とない。しかし記憶は残る。(絵画)

伊東慎特「唯(うた)―138」― 厚月樹 ⓘ
点空間等の接等による臨界域における人間存在の意味を表現しています。(ドローイング)

今井通彦「大地(空間の表皮にむけて)」
― 厚月樹 ⓘ
空間の表皮から覗く、心の大地、イメージとそこに宿る、樹と水面の叫び。(ドローイング)

泉木義夫「無題」― 厚月樹 ⓘ
白紙付による構成。(立体)

黒柳正孝「Two Blocks」― 厚月樹 ⓘ
メゾチント技法による「対比シリーズ」vol.2 (版画)

坂田和之「Quiet Scenery-Tea」― 厚月樹 ⓘ
Drawingによる「茶の静イメージ」構成。(ドローイング)

鈴木江彦「時間―いかもの」― 厚月樹 ⓘ
板ガラスと合成樹脂による温度的のある空間表現。(立体)

田宮話子「骨入の話」― 厚月樹 ⓘ
女性がたたずむ様子を会想場の観点に、抽象的に描出。(日本画)

松浦麻里「grass」― 厚月樹 ⓘ
草緑な等様が織り成し感覚と時に与える印象について。(立体)

杉田達哉「線鏡」
― しずぎんギャラリー「25帯」ミニギャラリー ❼
1月7日(日)-3月29日(木) 10:00-17:00
曲つるの事象が関係に絡み合い、不均衡で、不記憶なパランスの上に形界は成り立っている。(絵画)

常大3年環境デザイン学生、視覚伝達学生
―静青青春館AOI 1階ロビー ⓬
11:00-17:00

297mm×210mm

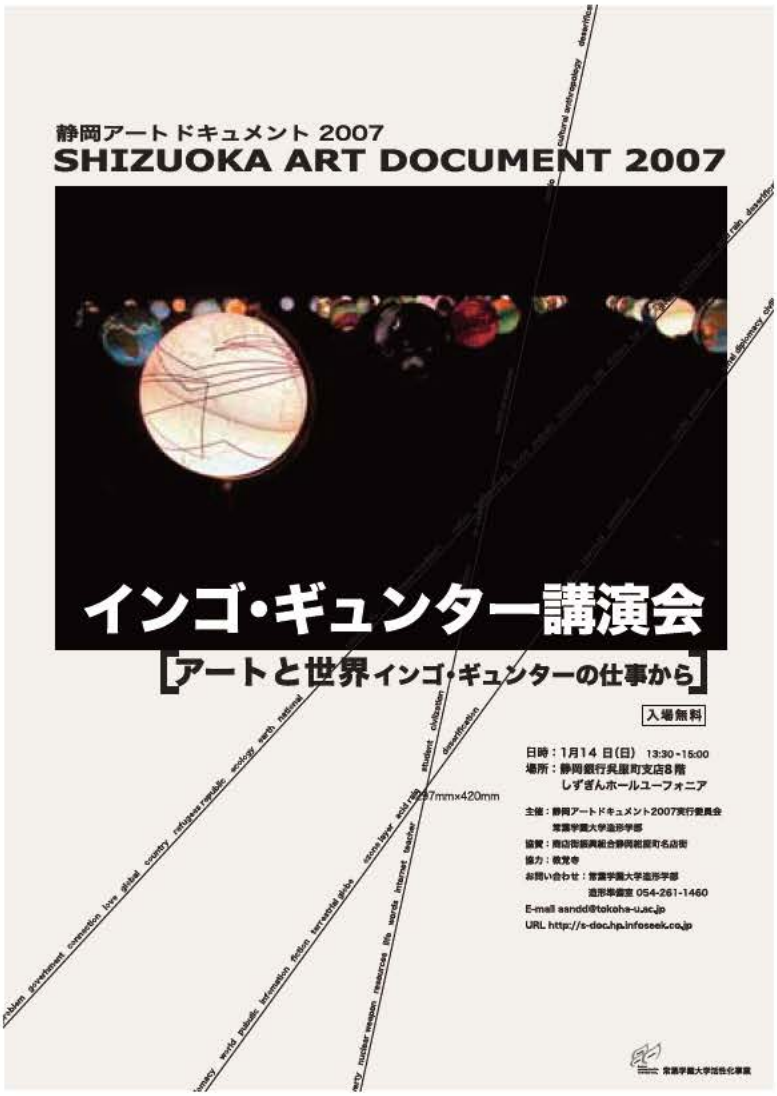
■スタッフ用カード

70mm×100mm

■インゴ・ギュンター講演会　ポスター会場用

260mm×297mm

■インゴ・ギュンター講演会　ポスター一般用



420mm×297mm

■インゴ・ギュンター講演会　チラシ

210mm×297mm

■Webサイト

インゴ・ギュンター講演会ページ

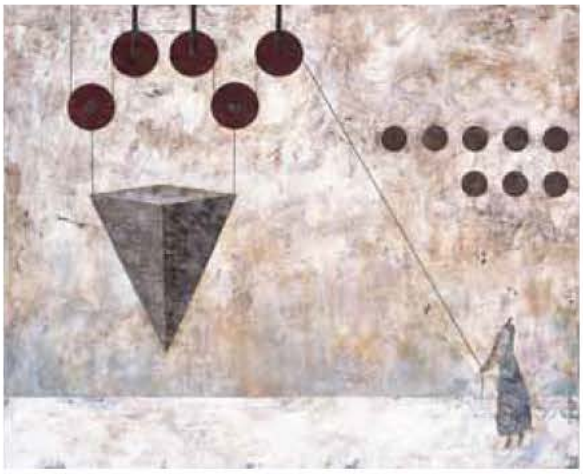
トップページ

展示案内ページ

作家紹介ページ

■視覚伝達コースよりの出品作品

制作者　杉田達哉（常葉学園大学　造形学部　教員）
タイトル　「連鎖」
制作年　2005年
素材　アクリル／キャンバス
サイズ　20号
展示場所　しずぎんギャラリー「四季」ミニギャラリー



制作者　伊藤直（常葉学園大学　造形学部
視覚伝達デザイン　4年生）
タイトル　「ヘルシンキ、ウィーンのデザインレポート」
制作年　2007年
素材　パネルに90点の写真ブロック
サイズ　180×90cm
展示場所　静岡音楽館AOI　1階ロビー
コメント　もしデザインを主張し過ぎない「普通さ」の中に自分の個性のようなものが反映させることができれば、より多くの人に受け入れてもらえる、生活の中でいきいきとしたデザインになるのではないかと思う。
（展示ボードより）

参加協力学生

天野　了	内川智裕	福井佑介	大橋　愛	加茂見奈子
青島美早	内野未来	落合秀年	川口美幸	杉山絢美
鈴木はつみ	鈴木芙由美	本間美穂	渡辺えりか	石川美澄
奥田千紗子	加瀬かおり	久保田眞生	澤村友子	瀬戸尾拓也
津田　翔	福島　優	寺田香織	秋場有紀	石川　歩
市川理沙	小栗沙也佳	川瀬雅弓	佐藤洋輔	柴原宏行
田中沙織	西山妹友子	望月英希	久松大悟	塚本南波
名波一己	阿部　譲	渡邉広隆	村松成美	村松香緒里
高林志帆	中道幸帆	伏見佳奈恵	山村理紗	

写真提供

奥中章人	長船恒利	杉森順子	山内啓司	柴田美千里
丹羽勝次	夏池　篤	内海健夫	蜂谷充志	持塚三樹
銭谷　均	加藤和夫	松野　崇	今井瑾郎	黒柳正孝
坂田和之	松浦峰里	杉田達哉	鈴木はつみ	奥田千紗子
加瀬かおり	久保田眞生	石川　歩	市川理沙	小栗沙也佳

静岡新聞社
P3 art and environment

主催：静岡アートドキュメント2007実行委員会
（夏池　篤、杉田達哉、蜂谷充志、土屋和男）
常葉学園大学造形学部

協賛：商店街振興組合静岡紺屋町名店街

協力：教覚寺、浮月楼、静活、静岡音楽館AOI、ミカサ写真館、LOFT、トラヤ、
Un tissu、サバイディール

助成金：常葉学園大学活性化事業
静岡市文化振興財団文化振興助成